

で利用できます。京都を訪れる外国観光客にPPTPアカウント発行サービスの実験も行っており、SCCJはその普及支援に取り組んできましたが、すでに様々な利用のされ方が出てきています。

こうした情報基盤が整備されていくのに従って、だれもがユビキタス医療サービスが受けられるようになります。例えば救急車の中で個人の診療履歴が積み上げられた電子カルテが閲覧でき、すぐさま応急措置ができます。現状では倒れている人が救急車で病院に運ばれてきても誰か分からない。多くのケースはありきたりの病気、例えば糖尿病などで、低血糖発作が原因で倒れたもので、ブドウ糖を点滴すると回復し、後遺症を残すこともありません。そういう一人ひとりの病歴などの情報が入手できれば、適切な医療が発生現場で行われるようになるわけです。

## 個人認証に高精度 高セキュリティの指静脈

--- そのために個人の特定が何よりも大切になるわけですね。

北岡 緊急時にもすぐに治療態勢に入れるためには個人の情報が必要なのです。その情報を入手するには個人の特定がきわめて大事になってくる。データの開示には本人の承諾はもちろんですが、本人である確認や



セキュリティの高い個人認証システムが必要で、とりわけ京都医療センターのような内分泌・代謝性疾患の高度専門医療施設としてナショナルセンターとなっている病院では、医療従事者、患者ともに本人認証が大切なのです。

「どこカル ネット」プロジェクトでは基本的に指静脈認証システムを利用しています。これからICカードなどに個人のIDやパスワード、指静脈紋が入った共通診察券が重要な役割を担うこととなりますね。

--- 指静脈認証システムは他のバイオメトリクスと比べ偽造や改ざんが難しく、高精度で高セキュリティです。

北岡 静脈パターンは個人差があり、医療の世界では以前から手術の際に手袋をすることから指紋認証は使用できず、必然的に静脈認証を選択することになったのです。麻酔事故が起きないようにするため指をアタッチメントで挟み近赤外線を使ってパターンを面で出し面で拾って本人確認を行います。特に指は手足で合計20本あり、複合認証できる上に、ノンタッチで確認できるメリットがあります。指2本を対象にすればマッチング率は高まり、誤差もぐんと低くなります。昨年に日立ソフト、サクサの両社が指静脈認証システムを組み込んだ、コンパクトで救急車にも積み込める情報端末が開発されました。それを使った患者再来受付機を実証テストしています。

## 本人確認できる地域全体の 共通診察券を発行へ

--- 今後の取り組みは。



北岡 ユビキタス医療システムの仕組みは一応出来上がったと思います。これからは京都高度情報化推進協議会と協働して進めている共通診察券をどのように発行するかがテーマです。

ID・パスワードや指静脈紋など個人情報を書き込んでICカードを作ろうとすれば、現在一枚が千円ぐらいになります。それで京都市の住民全員の共通診察券を作るとなると、人口が約140万人ですから約14億円かかることになる。診察券は無料で患者に配布することが法律で定められており、有料にすることはできません。ですからそれをどこが負担するかが問題です。京都高度情報化推進協議会メンバーの企業からの支援を仰ぐなどスポンサーシップを募っているところです。

それに医療施設へのインセンティブをどうするか、も課題ですが、この対応策としては国民健康保険の診療報酬に何点かを上乘せすることなどが考えられ、病院や診療所も参加しやすくなります。将来京都府全域にユビキタス健康・医療・福祉のネットワークが張り巡らされてうまくいけば、モデルケースとして全国にも広まっていくのでは、とみえています。

--- どうもありがとうございました。